

鷺  
峰



新年号  
第3卷第1号  
通卷第19号

驚峰新年号 目次

卷頭の言葉

実践者と代弁者

こきかしき代弁者たるより、愚直なる実践者たれ

4

自我協議義／第四回

久遠の本仏と人間釈尊

日高白象 6

仏陀は地上に実在した。そしてなお今日嚴然として久遠に生きているそれは人間釈尊である。仮空の仏陀にまどつてはならない。

我が入信の動機

み仏の國を求めて

中山玲子

18

これは一女子青年が、人間社会の矛盾、神と人間の相剋から、み仏の國を求めて歩いた、法華經入信の記録である。

信仰相談室

日蓮聖人の懺悔滅罪觀

日高白象

33

悔悔なき折りは、片羽の島の空飛ぶが如きものである。日蓮聖人のその生涯をつらぬいた此の痛酷なる自己懺悔を見よ。そこに眞実不誠なる信仰がある。

讀者之声

大阪真田山

陸軍墓地の復興悲願

藤塚隆重

行動雑誌

鷺峰を讀えて

分銅志静

久遠の心

自我偶譲義を讀んで

榎本蓮子

教養に替えて

堅実な本誌運営のために

振替払込みと一般通信について

編集後記

60 57 58 17

53 51

49

表紙題字／身延山法主藤井日靜親下  
表紙印刷／大阪東洋印刷社・長・藤原秀憲氏寄進  
表紙写真／インド聖鷺山へ渡る身延山金剛の次第像

# 実践者と代弁者

布教ということは、その宗教の尊さを、諸仏や神々に代って、代弁したり紹介したりすることに留まるものではござりません。若し、そういうことであるならば、ことさら宗教家を必要とはしないでしよう。哲学者は宗教家以上に神々の教理を哲学的に体系づけることでしょうし、文士は文筆をもつて宗教家も及ばぬ素晴らしい宗教的物語りを綴ることでしょうし、雄弁家もまた宗教家以上に巧みに説法することが出来るでしょう。そして僧侶は葬式、牧師は洗礼、神官はお払いといふ儀式とか、さもなければ神がかり的なことだけやっておればよい、というようなことになってしまうでしよう。

然し、たとえ学者や文士、雄弁家、或はその他一般の人々が、如何に巧みに諸仏や神々の代弁者として、その宗教の尊さを紹介することが出来たとしても、その人自身、透徹した信仰のない限り、生死の一大事という人間の根源的苦悩を救うことは出来ません。

然るに今日、そうした代弁者、紹介者に類するが如き、いなそれさえも口クロク出来ないでいる宗教家と称する者が、何と多いことでしょう。たとえば釈尊を語る者はあっても、釈尊の如く行ずる者はなく、日蓮大聖人一代六十一年の法難を説く者はあっても、大聖人の如く行ずる者はあります

# 葉言の頭巻

せんじ 口さきばかり形ばかりで実践がともなっていないのです。宗教沈退の原因は此処にあります。若し宗教家が、このまゝ代弁、紹介の域を出ないならば、早晚、指導者としての座を追われてしまうことでしょう。

体験なき信仰はありません。佛教とは信仰に関する没我的実践、その実践的全人格を通して始めて可能とされるのです。いやしくも法華經をたもつ者は、出家在家の如何を問わず悉く本化の菩薩であり、本仏釈尊勅命の仏子であるはずです。

仏子菩薩は、もはや代弁者でもなければ紹介者でもなく、体験者として如来の第一義である般智と慈悲、その光と力を、みずから実践によってみずからのもとし、その実践者的人格を通して、如来久遠の大悲願を、有縁無縁のすべての人々に伝え、人々の苦惱を除いて行くのです。法華經の如来神力品にも申されているではありますか。

「日月の光明の、能くもろもろの幽冥を除くが如く、この人、世間に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして畢竟して一乗に住せしめん」  
光です、力です。本仏釈尊の功德をこうぶらすして、どうして人一人を救うことが出来ましよう。どうして大衆を統理して円融一仏乘の平和世界へ導くことが出来ましよう。代弁者となるよりは実践者となることです。

# 久遠の本仏と 人間釈尊

その4



日高白象

5

日蓮宗では、常住不滅なる釈尊のことを「久遠実成の釈迦牟尼仏」と申しています。然し釈尊は、今よりおよそ三千年の昔、クシナガラ城外、キレン河のほとり、沙羅双樹のもとにおいて、人寿八十才を一期として入滅されてしまっています。これは、どうすることも出来ない歴史的事実です。

「：：にもかゝわらず、その釈尊が、どうして常住不滅であり、久遠実成であるのでしようか」

このことについて、まず仏滅後ににおける仏教徒の、仏陀觀の変遷から、ふりかえてみることにいたしましょう。

釈尊在世中の仏弟子たちは、釈尊こそ生死を超えた超人的靈格者と仰いでいまし

たところが、その釈尊さえも、一般的人々と同様に、死をまぬがれることが出来ず、涅槃の雲にかくれてしましました。

このことは、日頃から「諸行無常」と教えられていたのにもかゝわらず、当時の人々にとっては、天地もひっくりかえるような一大打撃でした。そして、

「何故、仏陀は亡くなられたのか？」

という疑問が、釈尊を失った堪え難い悲しみと共に、必然的に湧き起り、やがて教義上の問題とまでなって来ました。

この問題を解決するため、まず次のような説が起りました。

「仏陀が入滅されるのは、一人釈尊に限ったことではない。釈尊以前の過去無量劫の中においても、釈尊と同様に入滅された多くの仏陀がおられたのだ」

この説を代表するのが、過去世に七人の仏陀がおられたという「過去七仏説」です。もとより此處にいう過去の世とは、人文史上のことではなく、あくまでも形而上の世界をさすことは言うまでもありません。ところが、この過去七仏説は、時代と共に拡大されて行き、やがて仏教徒の間では無始久遠の昔における無量無邊の仏陀と、その淨土の実在を説き、その教法と功德をも説くに至りました。

もとより、それらの仏陀の寿命は、いずれも釈尊の、八十才という寿命よりも、更に長い長い阿僧祇劫といふ長年月を経たものであったことは申すまでもありません。

然し、それでも矢張り、釈尊と同様に入滅してしまった過去仏であり、滅後に開く功徳もまた、既に尽きていたものでした。

このようにして仏滅後の佛教徒は、過去無量劫の中において、無数の諸仏が実在したこととを説くことによって、釈尊の入滅に対する悲嘆と疑惑を解決すると共に、たとえ人間仏陀は入滅しても、仏界こそ常住不滅であるということを明かにしようとしたのです。

然し、たとえ釈尊以前の過去世において如何に無量無邊の諸仏がおられたのであるとしても、釈尊の滅後ににおける未来の仏陀がおられなければ、滅後の人々の教われるはずはありません。

こゝに抬頭して来た代表的な仏陀が、阿弥陀仏と弥勒仏でした。弥陀（ミタ）と弥勒（ミロク）は、語呂も似ていますが、共に仏滅後における未来の一切衆生を救濟しようと発願された仏陀です。

弥陀は西方十万億土の彼方にある安養極楽淨土へ、死後のすべての人々を往生成仏させようと誓いました。弥勒は五十六億七千万年之後、この地上の娑婆世界に仏陀として出現し、現実に生きている人々を救濟しようと誓いました。

蓋し、この両者の間には、たとえ天上と地上の差こそあれ、西方十万億土といふ、五十六億七千万年といふ、そのいずれにしても衆生の救済は、永遠の未来にかりられたものでした。これでは、今日只今、生きている人々を救済することにはなりません。そこで、こうした要望に応えて、すべての人々を現実に救済する道、いわゆる即身成仏の教えを説くに至ったのが、大日如来であったのです。

こゝにおいて、釈尊滅後における仏陀観

に、三つの類型が出来たわけです。一は法

身仏、二は報身仏、三は心身仏、これを通

常「法報心の三身」とも申しています。

法身仏とは、仏陀が自覚された精神内容を人格化したもの。精神内容（つまり実相真理）である以上、これを象徴した法身には、悟りを開くまでの修行というものはなく、それ自体無始無終、久遠ということが出来ましよう。その代表的な仏陀が大日如来です。報身仏とは、文字通り報いられた仏身、久遠の修行の果報として仏陀となられた人。その代表的な仏陀が阿弥陀如来です。

次に心身仏といふのは、法身にせよ報身にせよ、そういう久遠の仏陀が、衆生救済のために、地上に心現された仏身もつまり人間として地上唯一の仏身を成就した仏尊

のことです。

もともと釈尊に対し、心身仏といふ仏身觀はなかったのですが、諸仏の中に法身觀、報身觀という仏陀觀が成立するに従って、それらの立場から、釈尊の上にも形成されて来た仏身觀であったのです。

要するに、こうした三身觀は、釈尊の滅後、発展的に成立して来た仏身觀であって、もとをたゞせば釈尊の仏身上において、その精神内容を象徴して大日如来という法身仏を立て、修行と成道そして慈悲の救済を象徴して阿弥陀仏という報身仏を立てたものにすぎなかつたものです。

ところが仏教徒は、そうした根本的意義を忘れて、枝葉末節に固執し、それぞれの立場から、自分の奉する久遠の仏と、釈尊との關係を明かにするため、却つて本末關

倒して、

「釈尊は、久遠の仏である大日如来の<sup>仏現</sup>身として、地上のすべての人々をして大日如來に帰依せしめるべく法を説き、入滅後

大日如來の本体へ還ったのである」

と主張したのが眞言であり、

久遠実成阿弥陀仏

五濁の凡愚をあわれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ

迦耶城に<sup>仏現</sup>する

と、親驚みずから詠じているように、

「釈尊こそ、久遠の阿弥陀の<sup>仏現</sup>であつて、

すべての人々が念佛を唱えて、阿弥陀仏に帰依するように、教えることを本懷とされたのである」

と主張したのが念佛の一門であり、こうした傾向に對して、

「いや釈尊は、法報<sup>應</sup>三身未分以前の釈尊であつて、人間本来、すべての人々が持つてゐる仮性を開顯することを教えられたのである」

と主張したのが禪の一門であつたのです。

真言と念佛と禪は、仏教史上における三大潮流ですが、こうした主張の結果、肝心の釈尊は、大日如來や阿弥陀仏、或は人間本具の仮性を指さす指の如き、たゞ単なる案内者にすぎなくなってしまったのでした。

6

こうした中にあって日蓮大聖人たゞ一人  
敢然として本来の大義明分を明かにし、  
「各宗の者は、釈尊をはなれた仏を本尊と  
し、あたかも此の仏から、釈尊が<sup>仏現</sup>した  
かのように説いてゐるが、然し、もともと

三世十万の諸仏は悉く、釈尊が無明煩惱を滅して仏陀となられて以来、沙羅の林の中において入滅されるに至るまで、およそ五十余年の間、種々に方便の教えを説かれた時の仮設の仏、いわば方便の仏、分身の仏ではないか。

諸仏が方便、分身の仏である事実からすれば、釈尊こそ本仏であり、諸仏は釈尊の垂 その影にすぎない。

こうした観念的な諸仏や、諸仏の国土は釈尊によって假りに書き出されて来たところのものである以上、体が消えれば影も消えるように、釈尊が入滅されれば、必然的に、それらの座仏、蓮土もまた悉く滅尽してしまうものである」

と主張され、このことを觀心本尊説に、それ始め寂滅道場菩薩世界より

沙羅林に終るまで五十余の間  
華藏、密嚴、三麥、四見等の  
三十四土は

みな成劫の上の無常の土にして  
変化する所の

方便、実報、寂光、安養  
淨瑠璃、密嚴等なり

能変の教主釈尊、涅槃に入れば  
所変の諸仏、随つて滅尽す

土もまた以てかくの如し

と断言されたのでした。何と大胆な判決でしよう。何と厳正な宣言でしよう。大聖人はあくまでも歴史的事実にもとづいて、本末の大義を明分にされたのです。

そして現実に即して、人間釈尊そのものに久遠の本仏たる仏陀觀と、娑婆世界そのものに、常住不滅なる久遠の淨土觀を、法

華経の經文に照して發見され、如來壽量品を中心とする法華經の本門八品、靈山虛空會上において、十万分身三世の諸佛、ならびに文殊菩薩、彌勒菩薩等の如き、遡仏によって教化された無量無邊の述化の菩薩、等々をはじめ、三世十方法界の一切衆生を悉く來集、開会・統一して、みずから久遠の本仏たることを宣言しつゝ、その内証仏法を宣說して、本化地涌千界の菩薩に、法華經を付嘱された人間釈尊こそ、過去にも滅せず、未來にも生ずることもない永遠不滅なる久遠の本仏そのものであり、この本仏釈尊の淨仏國土もまた、現実の娑婆世界に即しつゝ娑婆世界を本土として、三災七難も離れ、變化無常の四劫も超越して、既に完成されている。

心の顛倒した凡夫には、これを知ること

は出来ない。然し本仏釈尊を我々が主師親の本尊として仰ぎ、その因行果徳の法華一仏乘たる仏知見の道にあって、妙法蓮華經の五字を持つ者、即ち地涌の菩薩のみが、これを感得することが出来、その者のみが本仏釈尊と父子一体である」

と主張され、このことを前述の鏡心本尊のつづいて、次のように示されています。

今、平時の娑婆世界は

三災を離れ四劫を出でたる

常住の淨土なり

仏すでに過去にも滅せず

未來にも生ぜず

所化以て同体なり

これ則ち己心の三千具足

三種の世間なり

蓮門十四品には未だ之を説かず

法華經の内に於ても

時機未熟の故か

此の本門の肝心

南無妙法蓮華經の五字においては

仏なお文殊・藥王等にも

之を付囁し給わす

いかに況んや、その已下をや

ただ地涌千界を召して

八品を説いて之を付囁し給う

その本尊の体たらく

本師の娑婆の上に宝塔空に居し

塔中の妙法蓮華經の左右に

釈迦牟尼仏・多宝仏

釈尊の脇士は上行等の四菩薩

文殊・弥勒等は、

四菩薩の眷属として末座に居し

述化他方の大小の諸菩薩は

万民の大地に廻して

婬闍月卿を見るが如し

十方の諸仏は

大地の上に廻し給り

仏弟子を表する故なり

かくの如き本尊は

在世五十年にこれ無し

八年の間にも、ただ八品に限る

こゝで肝心なことは、釈尊そのものを久

遠の本仏として仰ぐということは、釈尊が八十年の生涯の中で、成道の始めから、入滅の終りに至るまで五十余年の間、達仏

達士を立てて方便の教えを説かれた時の釈尊でもなく、また八ヶ年に亘つて法華經二

十八品を説かれた中でも、序品第一から安樂行品第十四に至るまでの逐門十四品を説かれた時の釈尊でもなく、また薬王菩薩本事品第二十三から普賢菩薩勸發品第二十八に至るまでの本門六品を説かれた時の釈尊でもなく、如來壽量品第十六を中心として徒地涌出品第十五から彌累品第二十二に亘る、ただ本門の八品を説かれた時の釈尊に限るというのです。

同じ人間であり、同じ仏陀でありながらどうして、その生涯をこのように差別して考え、その一部分しか本尊として認めない、かということについては、「何故だらうか」という不可解な疑問が当然起きて来ると思ひます。

然しそれは、如何に釈尊の成道後の内証は同じであっても、人々は釈尊の説くところの教えによって導かれるのですから、方便の教えを説かれた釈尊を本尊とする限りその道程も、到達する所も、方便の域を出難いものであり、釈尊が本仏として説かれた本法によってのみ、はじめて究竟の仏界へ入ることが出来るからです。

たとえば同じ東海道線で、大阪から東京へ行くにしても、名古屋行きや豊橋行きに乗れば、一生乗っていても東京に着くことはできません。乗り換えないければならないのです。

それと同様に、同じ仏教という路線でをつても、方便の乗物であれば、乗り換える以外、真実の目的地へ到達することは出来ません。本仏の乗物、この一仏乗に乗つてこそ、始めて究竟の目的地へ到達されるのです。

乗物を船にたとえてみれば、船長が本仏

或は己身を説き

釈尊であり、船が妙法蓮華經の五字の題目

或は己身を示し

そして船員が本化地涌の菩薩です。船長は

或は佗身を示し

船の全責任をもち、同時に船員のすべての

或は佗事を示す

生命をあずかっています。また船員も船長

それと同様に地涌の菩薩にして始めて、

地獄、餓鬼、畜生、修羅までも含める十界

が船長であることを、よく承知しています。

釈尊こそ久遠の本仏であることを知って、

地獄の事々物々に表現されたものとして、

仰ぐことの出来ない人々が、何と多いこと

仏知見の媒介もなしに、凡夫の無明煩惱も、

でしよう。日蓮宗以外の人々ならば兎も角

も、宗門内であってさえも、釈尊を通して

その奥に久遠の本仏をみ、その本仏を宇宙

神とか、実相神といったような、常住法身

と仰ぎ、寿量品の中で、

たのです。

元来「六或示現」は、寿量品の中に、

我れ常に此の娑婆世界に在りて

說法教化す

また余處の百千万億那由陀

阿僧祇の國に於ても

衆生を導利す

もうもろの善男子

この中間に於て

我れ燃燈仏等と説き

またまた我れ涅槃に入ると言ひき

かくの如きは皆

方便を以て分別せしなり

もうもろの善男子

若し衆生あつて

我が所に來主するには

我れ仏眼を以つて

その信等の諸根の利鈍を説いて

度すべき所に隨つて

处处にみずから名字の不同

年紀の大小を説き

またまた現して

當に涅槃に入るべしと言ひ

また種々の方便を以つて

微妙の法を説いて

能く衆生をして

歡喜の心をおこさしめき

と示されているよう、釈尊が衆生の機

根に応じて「名字の不同、年紀の大小」等

の差別相をもつて、諸仏を現ぜられたこと

を示すものにほかならないのです。要する

に「六或示現」は、仏界内における釈尊の

方便身ということが出来ましょう。

然るに、この「六或示現」を十界に約してしまつたため、久遠の本仏が大日如来の如き法身仏となり、口では「久遠実成の釈迦牟尼仏」とはいうものの、その実は、釈尊の奥に常住の法身としての本仏を観じ、釈尊は、その法身の影の如き存在となつてしまつたのでした。

人間釈尊を久遠の本仏そのものとみる仏陀説のキーポイントは、いうまでもなく法華經本門八品の靈山虛空会にあります。これを述べる前に提婆達多品の教相を通じて悪逆の提婆達多の現身に、過去世においては阿私仙人であり、未來世においては天王如来、と觀せられた釈尊の仮知見について述べてみるとことにしておきましょう。

## —— 教義に替えて ——

本誌は過去二ヶ年間、毎号のように篤峰教義を別刷り折込みしてきましたが、一般世間でも標語暦など多くなつて来たことと印刷代価の高くなつて来たことにより、新規より教義折込みを当分中止し、これに替るものとして、二月号より難解な仏教用語の解釈欄をもうけることにいたしました。つきましては「読者の声」や官製ハガキなどで、おたずねしたい仏教用語をお知らせ下さい。

またこれにあわせて本誌に対する読後所感、御意見、御希望など、おきかせ下さい。読者皆さまと共に本誌を、よりよき信仰雑誌として育てて行きたいと思います。  
御協力のほど切にお願い致します。(編集部)

(以下次号)

—我が入信の動機—

# み仏の国を求めて



中山玲子

神さまなんかあるものか／  
仏さまなんかあるものか／  
クルスが…マリアだって  
あるものか／

これは、去年の師走二十五日、クリスマスの夜、放送された或るテレビドラマの、  
クライマシクスシーンでした。

一人の純朴な娘が、雨の中、真新しいクリスマスの立てられた少年の、お墓の前で、雨と涙で、顔をクシャクシャにし、怒りと绝望に涙をふるわせながら、絶叫するシーンでした。

この「みっちゃん」と呼ばれる娘は、これまで、ひたすらに神仏の実在を信じ、世

1

の中の人々の善意を信じ、何時もどんな時でも、たゞ人のためと思い、今日もライ病患者の療養所で、患者さんのお世話をしながら、明るく、元気に働く娘でした。

患者の一人である幼い少年の全快に、

△たとえ自分の命を捧げても……

△と、神に祈る、やさしい娘でした。この美しい祈り、やさしい真心が、神仏に通じたのか、やがて少年の病気も全快し、近く退院することになりました。

だが然し、そこには、この悲しみが待つていたのです。退院を明日にひかえて少年は、フト風邪を引き込んだことから、ありげなく、みなかわれてしまつたのです。雨の中、タルスの前で、みっちゃんは、かたわらにたゞむ悔道尼に向つて、たゞきつけるよう叫びました。

「おたいたちが一体、何をしたというの……あたいたちは、何も悪いことなんかしていない！」：：それなのに何故、何故あなたたちだけが、ふしきわせなの？：：教えてよ、シスター！……！」

人々のために心をくだき、人々の不幸に心から涙した、みっちゃんも、或る日、患者さんたちのお使いで、町へ出た時、不運の交通事故にあって、その美しくも愁苦の連続であつた短い生涯を閉じたのです。

クリスマスの夜、このテレビドラマを見ながら私は、幾筋も涙を伝つて落ちたテレビの上の、涙のしづくを、じっと、みつめていました。

そうなのです。この娘の絶叫こそ、曾

ての私の、心の叫びにも通うものであったのです。

口にこそ出しませんでしたが、これまでに、神仏の存在でさえも、疑ってしまふくなるような、怒りと悲しみに打ちふるえたことが、幾度あったことでしょう。

生れてこのかた、精神的にも物質的にも、わざわざいた私たが、たとえ心の中にもはぐくまれて来た私が、たとえ心の中にもせよ、

△神さまや仏さまが、あるのだろうか△

という疑惑を持つことは、あまりにもセイタクな、悪道にも墮ちることであつたかも知れません。

けれども世の中の、この矛盾した現実、

人生を真面目に真剣に、おのれにも忠実に人のためをも思つて生きる人たちが、案外

不幸であつたり、心にもないことを、うそぶいて、上手に世渡りしたり、悪徳のなすまゝに生きる人々が、却つて安樂に暮している事実を見る時、こういう生々しい矛盾した現実に、果して神仏が、実在するのかどうか、考へざるを得なくなつてしまふのです。

### 3

身延山御書の中にもありました。

たとえ貧なりとも

信心強うして

志し深からんは

仏に成らんこと

疑いあるべからず

と、けれどもこれは、日蓮大聖人にして始めて言える言葉なのです。大聖人でなく

ても、法華経信仰に徹した人にして、始めて言い得る心境なのです。

ところが今の世の中に、さも

△私は信仰しています

というような殊勝げな顔をして、法華経

宣布だの、広宣流布だと、もつともらし

いことを口にしている人たちが、少なからず見かけられます。そういう人々は、今生でなくとも来世における、人ごとではない我が身の成仏を、果して、どれほど真剣に考へているのでしょうか。

信仰とは、見栄や外聞、言葉さきのことではないのです。自分自身の命をみつめたギリギリするような現実の問題なのです。ましてや、このみっちゃんのように、山村から出て来て、たゞひたむきに不幸な人々のために青春を獻げ、幸せを求めて絶叫

する者に……或はまた、年老いて、自分を殺してまで、幼い孫のために、精一杯働き、しかも生涯、何ら報いられることもなかつた老婆がいたとして、神は、そういう人たちに向つても、なお言うのでしようか。「後生を期せよ」

この人々は、いふえ私たちは、山の彼方の空遠く、幸せを求めているのではありません。死んだ後に、天国や極楽へ行こうと、そのために生きているのではありません。死後のことよりも、生きている現在たゞ今が、幸せでありたいのです。

そのため、世の人々の誠を信じて、精一杯、忠実に生きるのです。それなのに、不幸な目にばかりあう、そういう人たちに向つて、なおも神は言うのでしようか。

「それは、あなたたちが、過去世において

犯した惡業の因縁なのです」

と。然し、だが然し、

「今日が幸せでありたい」

と願っている人たちには、こうした言葉に

対して、

「今、ひたすら真心を尽して生きている現

在の私の姿を見て欲しい」

と思うことでしょう。そして、そうした神の言葉を、むしろ無慈悲な、或は残酷な言葉として嘆くことでしょう。

それとは反対に、惡徳を重ね、法網を巧みにくうり抜けても、人並み以上に豪勢な生活をしている人がいるとして、そういう人たちに対して、神が若し、

「それは過去世において、善根功德を積んでいたおかげです」

と言つたならば、一体、宗教は何のため

にあるのでしょうか。まるで惡を肯定し、善を否定するようなことになりかねないことは限らない、といわれはしないでしょうか。

#### 4

三世の因果律によれば、

「過去の因は、そのまゝ現在の果となり、現在の果は、そのまゝ未来の因となる」と言われています。

過去世において惡業の因縁を作った者は今生において、その報いをうけることでしょう。今生において惡業の因縁を作った者は、来世において、その報いをうけることでしょう。

それと同様に、過去世に善根を積んだ者は、今生に功德をうけ、今生に善根を積んだ者は、来世に果報をうけることでしょう。

けれども善人が苦しんでいるのは、過去  
に犯した悪業の因縁によるものであると

いうことや、悪人が楽しんでいるのは、過  
去世に横んだ善根の功德によるものである  
という理論には、たゞこれだけでは、どう  
しても納得することが出来ないのです。  
何故ならば、このまゝでは、まるで善人  
の顔に悪人の焼印をおし、悪人に善人の仮  
面をかぶらせるようなものであるからです。

たとえ忍苦の善人は、来世に幸いをうけ  
るといつても、そのことが現世の忍苦に、  
どれほどの慰めとなるのでしょうか。現実は  
また享楽の悪人は、来世に禍いをうける  
といつてみたところで、そのことが、どれ  
ほど悪人を反省させ、改心させる、てがて  
となるのでしょうか。悪人のせゝら笑いか聞

えて来るようです。  
その上、善人は忍苦する故に、過去世に  
罪悪を犯していたという刻印をうり、悪人  
は享樂する故に、過去世に善根を横んでい  
たという賞讃をうけるに至っては、却つて  
善徳をさげすみ、惡徳をたゞえるという、  
皮肉な矛盾を起してしまったのではないでし  
ょか。

それとも、こうした三世の因果律は、弱  
い善人よりも、強い悪人を尊ぶという事大  
主義によるものでしようか。

それとも、事大主義的な考えが、三世の  
因果律を、そのように歪曲してしまったの  
でしようか。

その短い生涯を、ライ病院養所において  
ほど悪人を反省させ、改心させる、てがて  
となるのでしよう。悪人のせゝら笑いか聞  
うちやんに教して、その忍苦の連続と、奇

禍の死を以つて、

「あの娘も、ライ病院養老所なんかで働かねばならなかつたり、そこで辛抱したものゝ奇禍にあつて死なねばならなかつたりしたものも、もとをたゞせば、前世に犯した悪業の因縁があつたゝめでしよう」

というようなことを、もつともらしく言う人がいるでしようか。若し、そういう人がいたとしたならば、張り裂けるような怒りを訴えずにはおられないことでしよう。

仮りに人が、みつちやんの前世について教えて私に言わしめるとするならば、私は、「みつちやんが今生で、すべての人々からたゞえられるほど、これほど立派なことをなしたのは、前世において、それがなされるほどの、素晴らしい善の芽を、はぐくんでいたからでしよう。」

と、今生の徳にあわせて、前世の善根をもたゞえずにはおられないのです。またこれと同様に、享楽の悪徳者に対しては、「今生、これほど狡猾な悪業をして栄えるには、前世において、よほど、いまわしい悪の種を蓄積していたからでしよう」と考えずにはおれないのです。

## 5

今、私たちが、

「あなたの前世の姿は、一体、何であつたのですか？」

と尋ねられたとしても、はつきり答える人が何人いるでしようか。私たちは、自分の前世の姿など見ることは出来ないでしよう。

でも私が、そう尋ねられたとしたら、き

と、こう答えると思います。

「やはり前世も人間であったと思ひます」

と、それは人間としてのプライドであり  
また現実に生きている人間としての価値を

思ひ、そこに生き甲斐を感じ、人間として  
生れて来た果報に感謝しているからです。

けれども実際には、或は私の前世は、春

の野に舞う蝶であつたかも知れません。或  
は、よその家の庭に咲く一輪の花であつた  
かも知れません。或は、その昔、戦場にか  
り出された一頭の馬であつたかも知れませ  
ん。

然しおたちは、どんなに背のびしても、  
現実に来世の姿を見ることが出来ないので  
同じように、前世の姿を見ることは出来な  
いでしよう。

そうした時、人間は、前世や来世もさる

ことながら、矢張り、今生只今の現実に主  
眼をおいて、その日その日を精一杯、真心  
を尽して生きながら、現実の幸せを求める  
のではないでしようか。

仏陀は申されました。

過去を追うことなかれ

未来を願うことなかれ

過去、そは既に捨てられたり

未来、そは未だ到らざるなり

されば、たゞ現在するところのものを  
そのところにおいて、よく觀察すべし  
振ぐことなく、動することなく

そを見きわめ、そを実践すべし

たゞ今日、まさになすべきことを  
熱心になせ

誰か明日、死のあることを知らんや

私は、三世を否定しようとするのではありません。むしろ前世や来世は、必ず実在すると信じています。

けれども今生の、この現実を等閑視したり、軽視、無視したりして、どんなに前世を論じ、来世を語ってみたところで、それが一体、何になるのでしょうか。却って、現実に対する鋭い感覚、批判、反省そして実践までが、ほかされてしまうのではないでしようか。

そういうことから、日蓮大聖人の立正安國論に、

三界はみな仏国なり

仏国、何ぞ衰えんや

十方は悉く宝土なり

宝土、何ぞやぶれんや

という仏陀の世界観に心を引かれ、「仏陀が建立された仏界とは、一体どういふものなのかな……知りたい！」と切実に思うようになつたのです。そして、こゝ一年の間、仏陀の国を求めて、身心ともに、さまよつたのでした。

幸い私は、周囲の環境に恵まれていました。東京の都心、日本橋小伝馬町にある身延別院の青年会の例会には、そのたびことに出かけて行つては、「御前さま」と呼び親しんでいる藤井教雄上人の講話を聞き、また遠く、身延山に近い波木井の里より八丁ほど登つた山頂の、醉悟園本妙庵に毎月参籠しては、日高白象上人の指導を仰ぎ、都心と山頂を屈強な修行の道場として、第一歩から仏国をたずねて、牛歩の歩みを続けたのです。

私の家は日蓮宗の檀家で、私も幼い頃から、お題目に親んでいました。然し、自分から求めて、真剣にお題目を唱えたのは、初めてのことでした。

その当初、私は、お題目を通して仏国を求める、迷いの此岸から、悟りの彼岸へと、果しなくよこたわる無明暗黒の大海上に、妙法五字の船を乗り入れ、懸命に橹をこぐよう、お題目を唱えつけました。

この間、東京身延別院における青年会のはち切れるような青春の集いは、目もさめるような大きな刺戟となり、人里を離れた本妙庵の孤独は、妥協も許さぬ自己対決の場となっていました。

る会社の会計でした。親の会社だけに、充分自由がききました。私は特別に会社の暇をもらって、唱題修行に専念しました。眼中に見えない遠い彼方にあるであらう、み仏の国を求めて……。

けれども、やがて私の信仰の在り方が、あやまつたものであったことが知らされたのです。

仏国土は、山の彼方の空遠くあるものでなく、お題目は、そこへ行くための地図でもなければ杖でもなく、或は煩惱の大海を渡る船の橹でもなかつたのです。

仏陀はみずから、私たちの眼前におられたのでした。仏国土は、私たちの境に即していだのでした。そして仏陀の放たれる光明は、私たちの周囲に、サン然として輝き、仏陀の唱えられるお題目の声は、カ

リヨウビンガの書きとなつて、私たちの住む天地虚空一杯に、こだましていたのです。

それは今、始まつたことではなく、久遠

の昔から、そつだつたのでした。仏陀釈尊は、久遠の昔から、流転する私たちのそばにおられ、そして今も、無限の慈悲の眼をそついでおられたのです。

「仏陀は生きている」

何と偉大なことでしよう。仏陀は、私たちの主として、親として、そして師として私たちのそばに生きておられたのです。

三世十方の諸仏、無量無邊の諸天善神は

この本仏釈尊を中心として、三千大千世界

の虚空にもあふれんばかりでした。それは生きとし生ける、すべてのものを包摶々取

せんとする生きた大マンダラ仏界でした。

大マンダラ本尊とは、御宝前の壁にかりら

れた一片のかり軸でなかつたのです。

## 8

けれども世の人々の中に、この仏界に入つた者が少いようだ。靈界においても、この仏界に入つた神靈、精靈は少く、悪鬼、惡靈は充満して、現実の世の中を、かき乱していたのでした。

日蓮大聖人が立正安國論の中で、

国土乱れん時は

まず鬼神乱る

鬼神乱るゝが故に

万民乱る

と仰せられたことは、まさしく世の真相であつたのです。

鬼神や惡靈とは、観念的なものでもなく思想的なものでもなく、実体として実在し

すべての人々を陰に陽に悩乱し、人生を破壊し、家庭を破壊し、社会を、そして世界

全体までも混乱に墮し入れていたのです。

大聖人は更に、

仏法は体なり、世間は影なり

体まぬがれば、影なぐめなり

と仰せられていましたが、全く世の中の現実の乱れは、その本体界である靈界の乱れ

によるものであったのでした。

火事は対岸にあるのではなく、三界がそ  
のまゝ火宅だったのです。この恐るべき事  
実を知った時、私はリツ然とせずにはおら  
れませんでした。

悪鬼、惡靈の乱れは、自分の家庭や、  
自分の体を別にした周囲、或は、その他の  
場におけるもののみでなく、自分の家庭に  
も、自分自身の心身の内にも、忍び込むも

のであったのです。

念佛無間、禪天魔

真言亡國、律國賊

と獅子吼された大聖人の四個の折伏は、  
たゞ単なる主義、思想の折伏でなく、それ  
らの宗教によって、更に增長し跳梁、跋扈  
する惡鬼、惡靈に対する折伏であつたので  
した。

## 9

最も恐るべきは、真言の祈りでした。大  
聖人自身、その全生涯を通して、最も心を  
碎かれたものね、真言に対する折伏であつ  
たといわれていますが、我欲のために、  
悪鬼、惡靈をも駆使して折る真言の、秘  
密加持禪の恐るべき実話の数々を開けば  
思わず背筋に冷水をあびせられ、肌に粟立

つさえ覚えずにはおれないほどでした。

のみならず寒心にたえないところは、日蓮門下七百年の伝統の中に、特に真言思想が侵入し、現になお日蓮宗の大部分が、真言におかされたまゝになっているというこ

とでした。

人を救い、世を救い、そして国全体、世界全体を救い得るものは、もはや日蓮大聖人が唱導された法華經信仰以外、何ものもありません。

それなのに日蓮門下の大半が、新興宗教

をも含めて、殆どのものが真言に堕ち入って、本心を失い、みずから真言の毒薬にまでされているという事実にすら気付かないでいるという、この現実を直視する時、わ

けでも日本宗教界の癌となつた創価学会の実体が、実は法華經の仮面をかぶつた真言

そのものであるという事実を見きわめる時、今こそ本化の菩薩が奮起して、すべての人々の背後にあって、人生を、家庭を、社会を、引いては国全体、世界全体までも惱乱している悪鬼、惡靈に対し、果敢なる法戰を展開しなければならない、と思うのです。 でなければ、三界こそ仏國として、私たちの頭上に輝いている本仏の大マンダラ仏界は、何時になつても顯現されないことです。 私たちは、眞の仏子として、仏陀の仏國に自受法樂すると共に、悪鬼、惡靈の充満する世界に向つて、開闢の法戰を開闢するのです。

その戦いは、表面上の現実社会の矛盾を解決することよりも、もっともつと深刻な、

厳しいものでしよう。

けれども、私たちがやらなければ、誰がやるというのでしょうか。私たちの力は、どんなに小さく弱くても、

異体同心ならば

万事を成す

という大聖人の教えの通り、心をそわせ力をあわせて行くならば、やがて山をも抜く力となりましよう。

そして一人一人が、自分に与えられた環境の中で、仏天の力と、その加護を信じてやり通す時、この時、仏子としての無限の生命に生きる喜びを、心から味わえるのではないかでしょうか。大聖人が、

信心強うして

志し深からんは

仏に成ること

疑いあるべからず

と仰せられた言葉を、我が身に体して感謝出来るようになるのではないでしようか。

## 10

東京小伝馬町の身延別院や、波木井の醒悟園本妙庵で学んだことは、およそ以上のようなことでした。

その後、私は、現下に完成されているみ仏の国を、かすかに、ほんのかすかに、あたかも竹膜を隔てゝ見るが如くに仰ぎつゝお題目こそ、

我即歡喜 諸仏亦然

我れ即ち歡喜す

諸仏もまたしかりなり

という本仏釈尊の功德体そのものとして一念唱誦の中に、上は仏界をたゞえると共に

に、下は地獄、餓鬼、畜生等の愚直にも回向すべく努めて来ました。

大聖人が鏡心本尊妙の中で、

今、本時の娑婆世界は

三災を離れ、四劫を出でたる

常住の淨土なり

仏、過去にも滅せず

未来にも生せず

所化をもつて同体なり

といふ境地には、到底、及びもしません

が、然し、念佛や真言等の、よこしまな宗教によつて、ますます跳梁跋扈して行く悪鬼、悪靈の実体を、そしてそれらの悪鬼、惡靈によつて、ますます苦しんで行く善良なる人々の姿を思う時、私の唱題は、ますます強盛になつて行かざるを得ないのですみづちやんの不幸も、悪鬼惡靈の所為で

あつたかも知れません。けれども、そのテレビドラマの中で修道尼が、神の前にぬかずいて言ったように、若し今、

「あなたは、どんな人が好きなの」

と問われたならば、私も、その修道尼と同じように、即座に、即座に答えるでしょう、

「みづちやんのようない人……」

とも何故ならば、たとえドラマであつたとしても、こゝに描かれた、みづちやんといふ娘の姿こそ、現代庶民の中の菩薩の姿であると思うからです。そして、たとえ前述に、如何なる苦難があつても、法華経の菩薩道に生きる以上、みづちやんのようない苦の道を進まねばならない、と思うからです。

(完)

信 仰 相 談 室

日蓮聖人の懺悔滅罪觀

〈その1〉

解說 日高白象

さきに昨年の十一月において、  
「どうすれば罪障は消滅するか」

というテーマのもとに、

一切の業障海は

みな妄想より生ず

若し懺悔せんと欲せば

端座して実相を思え

衆罪は霜露の如し

慈日よく消除す

といふ、法華經の結絃である觀音賢菩薩  
行法經の中の一節を、質問に答えて解説し  
てみました。

今、その要点を、もう一度、振り返って  
申し上げてみますと、右一節の「妄想」と  
いうのは、仏知見によらない凡夫の心を總

称したものであって、これが身口意の三業を通して、すべての罪業・罪障の種子となっているということ……。

「実相」というのは、もちろん諸法実相のことですが、然しこれは、たゞ観念的な理論の世界ではなく、仏陀の慈悲と教説いわゆる仮知見によって照し出された絶対なる事相世界、即ち仮界ということを理に約して言つたもの……。

次に、その実相を「思う」ということは、相対的な立場にあって、自己の思索の中で、真如実相の理を、自己本位に、觀念觀法をもつて、とらえるということではなく、仮知見を揚仰し、ひたすらこれを思念想念もつて自己の全生命を仮知見に全托して、仮知見の世界に入るということを、三業の中の意業に約して言つたもの……。

更に「衆罪は霧露の如し、懸日よく消除す」ということは、過去遠々劫來、無量深重なる罪障を、自分という相対的な立場にあって、しかも相対的な人智、自力によつて、一つ一つ消滅して行くよりも、絶対なる仮界に入り、絶対なる仮力によつて消滅する方が、如何にたやすく、如何に速かであるかということを、こうした譬えをもつて示すと共に、ひとたび仮知見の世界に入れば、これまで犯して来た過去無量の罪業は、業報として、なお身にうけ、生れ代り、死に代り、お釈迦さまと等しき仏身を成就するまで、消滅して行かねばならないとします。假想の心は、瞬時に消滅し尽され、即身成仏の段階の中でも、その身そのまゝ、真の仏子として未来の成仏が決定されてい

る、ということを象徴したもの……。

とう、大体、以上のようなことでした。

ところで、その時の質問では、更に、「日蓮大聖人は罪障消滅ということを、どのように教えられているか」

とうことで及んでいましたので、引きついで、これから、そのことについて申し上げることにいたしましょう。

## 2

申すまでもなく日蓮大聖人の信仰は、一にも二にも、南無妙法蓮華經とお題目を受持宣布することになります。罪障消滅観もこれより一步も出るものではありません。ところがこれを、前に掲げました觀音贊菩薩行法經の一節に対比してみますれば、

行法經では表現の仕方が、身口意の三業の中の、意業を中心としていますので、必然的に「妄想」という心に対しても「実相」

といふ哲学的な表現を用い、実相といふ以上、これを「思う」という言葉を使い、思うという表現に対しても「端座」という言葉や「毘盧」といふ言葉を用いていますが、大聖人の場合は、

法華經を余人の読み候は

口ばかり言（ことば）ばかり読みども

心は読まず

心は読みども身に読まず

色心二法ともに

遊ばされたこそ貴く候へ

と仰せられている通り、身業実践の上に三業一致を強調されておられますので、行法經のそれとは、たゞ内容は同一であつ

ても、表現の仕方に意業中心と身業中心

という相違が歴然として来ているのです。

そこで、大聖人の唱題滅罪という実践からみますれば、

釈尊の因行果徳の二法は

妙法蓮華經の五字に具足す

我等この五字を受持すれば

自然に彼の因果の功德を

譲り与えたもう

と、觀心本尊妙に大聖人みずから明示されておられる通り、妙法蓮華經の五字こそ本仏釈尊の因行果徳の二法、即ち行法經にいうところの諸法実相の教旨、仏知見そのもののですから、行法經に、

「端座して実相を思え」

ということは、とりもなおさず

「自行と化他に亘って、南無妙法蓮華經と

お題目を受持する。但信口唱する」

ということになるのです。

行法經に「端座して」とあるからといつて、お題目を唱えるにしても、禪僧のように、お寺の本堂や道場に端座して、釋迦三昧、唱題三昧に入ることが、大聖人の唱導された本化修行のすべてとでも思つたら、それこそとんでもないことです。

前にも述べましたように、行法經にいうところの「端座」とは、意業中心の文意上、必然そういう表現を用いたのにすぎませんので、端座による唱題三昧が、大聖人のいう修行のすべてであるとは言い切れたものではありますせん。

では

「日蓮大聖人の身業中心の実践修行に至つては、端座合掌による唱題修行はなかった

か」

「と、決してそうではありません。

といふのは、久遠の本仏教尊の前にぬかず

いた、懺悔と讚嘆の唱題祈念こそ、修行の根本でもあり、また基本でもあったからです。

然し、大聖人の場合、決してそればかりではありますんでした。むしろ他を教化教育するという化他布教こそ、自らの修行、即ち自行の完成を見出されていました。このことを通常「自行即化他」「化他即自行」とも申されています。

### 3

本論でも、しばしば常不輕菩薩のことが述べられていますが、法華經第二十章の常不輕菩薩品の中には、

不尊説詔經典 但行礼拝  
もこばら經典を説詔せず

たゞ礼拝を行ず

といわれている通り、その当時の人々が山林にこもって神定三昧にふりり、或は寺院殿堂の奥深く、經典説詔三昧にひたつていた頃、常不輕菩薩たゞ一人、神定三昧にも經典説詔三昧にもふけらず、むしろ街頭に出て、道行くすべての人々を、ひたすら合掌礼拝しました。そして会う人ごとに、

我深敬汝等 不敢輕慢 所以者何  
汝等皆行菩薩道 当得作仏 (二十四字)

あえて輕慢せず

所以はいかん

汝等みな菩薩道を行じ

まさに作仏することを得べし

と呼びかけました。然しことは、

「我等、かくの如き虚妄の授記（未来において仏陀となることが出来るという印可）を用います」

と怒り、却って悪口罵倒し、或は杖木瓦石をもって打擲しました。迫害は続きました。然し不輕菩薩は、如何なる迫害にも屈しませんでした。

そして、迫害を歎受することによって、

過去無量劫の罪業を悉く消滅し、六根清浄なることを得て、来世において釈迦牟尼仏として成道することが出来たのです。そして、この時、曾て不輕菩薩を迫害した人々は、迫害したことの縁として、すべて釈迦牟尼仏の仏弟子となっていた、というのです。

以上が、常不輕菩薩品に説かれている物

語の概要ですが、不輕菩薩が、生涯に亘る

化他の迫害をこうむることによつて、過去深重なる罪障を悉く消滅し尽したこと、

この經典の中では、

其罪畢已（ございひいち）

その罪おえおわつて

と申しております。大聖人もまた、このことについて転受輕受法門、という著作の中で、

不輕菩薩の悪口罵詈せられ

杖木瓦石をかほるも

故なきにはあらず

過去の誹謗止法の故かと見えて

その罪おえおわつて

と説かれて候は

不輕菩薩の難にあう故に

過去の罪の滅するか

と見えはんべり

と仰せられて います。こゝに大聖人の滅

罪規をうかゞうことの出来る先証がありま

す。

#### 4

大聖人は聖人知三世事という著作の中で

日蓮は、これ法華經の行者なり

不輕の跡を継続す

といふ、また呵責誘法滅罪鈔の中でも

日蓮は、かの不輕菩薩に似たり

といふ、更に佐渡御書の中では、

日蓮は、過去の不輕の如く

当世の人々は

かの輕毀の四衆の如し

人は替れども、因はこれ一なり

寺泊御書では、

法華經は三世說法の儀式なり

過去の不輕品は今の勸持品

今の勸持品は過去の不輕品なり

その時、日蓮は即ち不輕菩薩たるべし

顕仏未采記の中では、

彼の二十四字とこの五字と

その語、異なるといえども、

その意これ同じ

といわれてゐるほど、不輕菩薩の芳触を  
慕われていました。即ち大聖人の菩薩道と  
は、常不輕の菩薩道そのものであり、その  
滅罪觀もまた、常不輕菩薩の滅罪觀そのも  
のであつたのでした。そして、その菩薩道  
を実践することによつて、勸持品に説かれ  
ているところの、あらゆる忍難を色説し、  
始めて上行菩薩再誕の自覺を明示されるに

至ったのでした。

若し仮りに、不輕菩薩の如き化他の忍難が、大聖人になかったならば、おそらく勸持品の色説もなく、従って上行再誕という大自覺も、胸中深く秘めたまゝ、遂に表示されるには至らなかつたことでしよう。

それほど常不輕菩薩は、法華經二十八品の經典中、大聖人の法華經実踐上、欠くことの出来ない、最も大切な經典であったのです。

## 5

大聖人が佐渡ガ島へ流罪された、翌る文永九年の三月二十日に、したゝめられた佐渡御書の中では、

日蓮もまた、かく責めらるゝも  
先業なきにあらず

不輕品に云く

其の罪おえおわって、等云々  
不輕菩薩の無量の誘法の者に

罵詈打擲せられしも

先業の所感なるべし

いかに況んや日蓮

貧窮下賤の者と生れ

旃陀羅が家より出でたり

と申されていますが、こゝにいう先業とは、過去および過去世において犯した、みずから誘法の罪業にはかなふません。

では不輕菩薩が、化他忍難によて其罪畢已して行つたというその罪を、過去々劫災の誘法と觀せられた大聖人は、みずから的人生において大難四ヶ度、小難數知れずといわれた忍難の中に、みずからの罪を如何ように感ぜられていたのでしょうか。

日蓮もまた、かく責めらるゝも

先業なきに至らず

といふ、その先業とは、具体的に言つて、  
一体、如何なる謗法罪であつたのでしよう  
か。このことについて大聖人は、みずから  
佐渡御書の中で、次のように申されてい  
ます。

日蓮も過去の種子

すでに謗法の者なれば

今生に念佛者にて数年が間

法華経の行者を見ては

未有一人得者 千中無一

等と笑いしなり

今、謗法の酔い醒めて見れば

酒に酔える者の

父母を打ちて悦びしが

酔いさめて後、嘆きしが如し

嘆けども申斐なし

此の罪消えがたし  
いかに況んや過去の謗法の

身中に染みけんをや

経文を見候えば

鳥の黒きも鷺の白きも

先業の強く染みけるなるべし

これは大聖人が三十二才の建長五年四月  
二十八日、千葉県安房郡の清澄山頂、旭が  
森に立って、太平洋上、はるか水平線の彼  
方よりさし昇る旭日に向って、始めて開無  
妙法蓮華経と唱えて、立教開宗を宣言され  
るに至るまで、十二才の出家以来およそ二  
十年間、たとえ修行のためとはいえ、念佛  
法門の奥義をみきわめんとするにあたつて  
は、その求道の真剣さのあまり、天台法華  
の修行者をみるにつけても、念佛門で教え  
られるまゝに、

「末法の世に於いては、法華の難行道を如何に修行してみたところで、いまだ一人も解脱することを得た者はない。まさに千中無一だ」

と嘲笑したことがあつた事実をよりかえて、その誇法の罪を、酒に酔つた者が、酔いにまかせて父母を打ち、酔いのさめで後、如何に不幸を嘆いても、父母を打つたという罪の事実は消え難い、という譬えをもつて、みずから深く懺悔すると共に、今生に、かかる誇法の果を犯すに至つた因を、過去悠久の昔にさかのぼつて至でも、その因業を追求して、懺悔せざるにはおられなかつた胸中を、告白するものにはかなりません。

なお過去世における誇法の罪科については、同じく佐渡御書の中に、

また過去の誇法を案するに

誰か知る

勝意比丘が魂にもや

大天が神（たましい）にもや

不輕々毀の流類なるか

失心の余残なるか

五千上慢の眷属なるか

大通第三の余流にもやあるらん

宿業はかり難し

と仰せられていますが、こゝに言うところの「勝意比丘」とは、諸法無行經に説かれているものであつて、釋子音王如来の滅後末法の世において、善根菩薩が諸法實相の深義を説いていた時、これを虚妄邪義邪說と誹謗したため、千劫阿鼻地獄に墮ちてしまつた人のこと。

「大天」とは、釈尊滅後の部派佛教時代、

大衆部を分裂せしめて制多山部を創設した

転して来た人々のこと。

教団破壊者のこと。

「不輕々毀の流類」とは、法華經不輕品に  
説かれているものであつて、威音王如來の  
滅後像法時代に、不輕菩薩を迫害した人々  
の中、不輕菩薩が釈迦牟尼佛となつた時、  
その仏弟子ともなることが出来ず、現代ま  
でも流转して来た人々のこと。

「失心の余残」とは、法華經寿量品に説か  
れているものであつて、あやまつて飲んだ  
薬のため、本心を失つた子供たちの中、  
父なる良医が与えようとした良薬を、飲も  
うともせずに毒発闇乱し、遂に父を死の旅  
へ赴かしてしまい、父の死を知らされること  
とによって、始めて心遂醒悟、良薬を飲む  
ことによって、毒病皆癒したのであるが、  
然し、この時、これにも漏れて、現代へ流  
傳をはじめ、一切經に出て来る説法者の姿

「五千上慢の眷属」とは、法華經方便品に  
出て来るものであつて、釈尊がいよいよ未  
顯眞実の法華經を説こうとされた時、座を  
蹴つて去つてしまつた五千人の、増上慢な  
人々の眷属ということ。

「大通第三の余流」とは、法華經化城喻品  
に説かれているものであつて、大通智勝仏  
の時代、その十六王子が法華經を説いて下  
種結縁せしめた三種の四衆の中、第一種は  
直ちに成仏を得、第二種は其の後、仏種を  
熟して成仏したにもかゝわらず、第三種  
は遂に仏種を開発することも出来ず、現代  
にまで流转して来た人々のこと。

これらはすべて説法の代表的な人々です  
が、總じて大聖人は、かくの如く法華經々  
典をはじめ、一切經に出て来る説法者の姿

を悉く、我れと我が身にあてはめて、  
「彼等こそ、過去世における自分自身の、  
罪の姿ではなかつたのか」

と反省、懺悔せずにおられなかつたので  
した。いな実は、それほどまでも、誘法  
の罪といふものに対しておののかれ、みず  
からを厳しく律しておられた、と申せまし  
よう。

更に大聖人は開目録の中で、

我れ無始よりこのかた

愚王と生れて

法華經の行者の衣食田畠等を

奪い取りせしこと教知らず

当世日本国の諸人の

法華經の山寺を倒すが如し

また法華經の行者の頭を

刎（は）ねることその数を知らず

と過去世における誘法の罪科を、この上

うにまで痛酷に推量し、告白懺悔され  
ますが、蓋しこのことは、実は大聖人の代  
表的權越である四条金吾が、極楽寺良觀  
に帰依していく主君江馬光時の誘法を直諭  
し、このため主従の關係が険惡となり、遂  
には閉門され、領地まで没収されるという  
事件が勃発したのですが、權越の中でも、  
こうした難にあうを見るにつり、

「その原因は、私が過去世において愚王と  
なつて、法華經の行者の衣食・田畠等を數  
知れず奪略した誘法の罪があつたゝめであ  
ろう」

と懺悔され、また大聖人自身、文応元年  
八月二十七日、鎌倉松葉ガ谷の草庵を焼打  
にされたという法難があつたけれども、  
「その原因は、私自身が、曾て過去世に

おいて、悪王となつて、多くの法華經の寺院堂閣を破壊した誘法の罪があつたのであります

あらう」

と懺悔され、或は文永元年十一月十一日房州小松原において、地頭東条景信の伏兵にあい、みずからも眉間三寸の太刀傷を負い、鏡忍坊や工藤吉隆は、その場で討ち取られたという小松原の法難。更に文永八年九月十二日、龍口法難等々の剣難にあつて、龍口法難等々の剣難にあつて、

「その原因は、私が過去世において、悪王と生れて、数知れず法華經の行者の頭を刎ねたこともあつたであろう、その誘法の罪の報いにほかならない」

と懺悔され、その六十一年の全生涯に亘つて、絶え間もなかつた大難四ヶ度、小難

数知れずといふ、無量の難にあわれたつけても、変ることなき懺悔であつたのです

何と深い懺悔でしよう。大聖人は如何なる

ばかりの懺悔でしよう。大聖人は如何なる迫害にあわれても、迫害を加える誘法者の姿を通して、彼等よりも更に大きく、更に深く犯したであらう過去世における、みずからの大誘法の罪をたずね、迫害する人々の罪を、みずからを罪とし、迫害する人々を責めずして、みずからを責め、みずから

仏天に懺悔しぬいて行かれたのでした。

## 6

こゝに有名なエピソードがあります。それは龍口法難の際のことでした。断頭の座につかれた大聖人は、泰然自若としていました。慟哭号泣する弟子檀越の中、四条金

吾は痴死せんとして大聖人の後に正坐し、懷劍をにぎり、襟を開いて切腹の時を期していました。

刑吏が邪嗣丸の劍をひっさげて、大聖人の後に立ちました。この時、金吾が今生最後の挨拶として、

「只今なり……」

と申し上げたまゝ絶句し、思わず落涙しました。これを見た大聖人は、

「不覺の駭ばらかな、これほどの悦びを笑えかし」

と静かに訓されているのです。

断頭の刑場にあって、大聖人が泰然自若としていたのは、英雄豪傑のそれではなく、無始以来の深い懺悔によるものでした。

これにさきだち大聖人は、龍口の刑場へ引かれて行く時、稚童熊王磨を使いに立て、

四榮金吾に次のように伝えられています。

今夜、頬切られにかかるなり

この数年が間、願いし事これなり  
此の娑婆世界にして

雉となりし時は鷹に撲まれ  
鼠となりし時は猫に食われ  
或は妻に子に敵に身を捨て  
所領に命を失いしこと

大地微塵よりも多し

法華經の御為には

一度も失うことなし

されば日蓮、貧道の身と生れ

父母の孝養心に足らず

國恩に報する力なし

今度、頸を法華經に奉りて

其の功德を父母に回向し

其の余をば弟子檀那等にはぶくべし

と申せし事これなり

この言葉は、「法華経に命を捨てるは、何度も石に金（へこがね）を替え、糞に米を替うるなり」という大聖人の、日頃の信念を如実に物語るものにはかなりません。

7

今、大聖人の懺悔滅罪觀を偲びながら、私たちの信仰を振りかえってみる時、私たちの罪業觀、懺悔觀は、何とあさはかなものでしよう。大聖人のそれにくらぶれば泡沫にもすぎません。

法華經を信仰している今日、人から悪口された時、ムツとすることはあるても、大聖人のように、「悪口されるのは、自分が曾って、今生でなくとも過去世において、それ以上の惡

口をしたからだ」というような反省をしたことが、何度もしたことでしょう。ましてや悪口した人々に対して、大聖人のように、「その人こそ、曾って犯した自分の罪を教えてくれているのだ」と感謝することがあったでしょう。たとえ今、日蓮大聖人の門下として、強盛な信仰をしているとしても、法華經を信仰していない人々の姿を見ては、大聖人のようにならなければなりません。

「それらの人々こそ、曾って法華經を信仰していなかつた頃の、自分の姿を写し出しているのだ」と懺悔することが曾つたでしようか。

朝夕のお勤めの時、「誘法懺悔、罪障消滅」

と祈りながらも、災難を滅罪と忍受する  
信仰の悦びをいたく人々が、果して何人い  
ることでしようか。

懺悔なき法華經信仰はありません。懺悔  
深き人々こそ、眞に法華經をたゞえている  
のです。

法華經の信仰を強くすれば、三障四魔、  
三類の強敵は覗い起つて来ます。三類の強  
敵とは、勸持品二十行の偈文に出て来る法  
華經の行者の怨敵、

一、俗衆増上慢といふ朝野の在家大衆

一、道門増上慢といふ宗教家

これらが競い起つて難を加える時、その  
難を忍受して、はじめて滅罪が成就されて  
行くのです。

難を受けずして、法華經の行者といふこ

とは出来ません。法華經が万世不滅の真理  
であるならば、鎌倉時代も現代も、受難に  
変りはありません。滅罪の在り方も、また  
然ります。

大聖人は諫曉八幡妙の結文に、次のように  
申されています。

末法には一乘の強敵充满すべし

不輕菩薩の利益これなり

おのの我が弟子等

励ませ給え、励ませ給え

(以下次号)

懺悔なき信仰は  
片羽の鳥の  
空飛ぶと似たり

大阪市真田山

声

陸軍墓地の復興悲願  
十一月号を読んで

兵庫県西部日蓮宗  
檀信徒協議会長

飯塚 隆重

その1

読者

私が日高上人をはじめ鷺峰会の学生諸士にお会いしたのは、昭和三十八年の夏休み身延山布教別動隊として兵庫県西部管内の姫路、龍野に布教へ来られた際、檀信徒協議会長としてお世話をしたことでした。

頃来、鷺峰会発行の本誌を毎月愛読していましたが、昨年の十一月号に掲載された大坂市における身延山街頭布教紀行文中、真田山陸軍墓地の荒廃している様子が報道されていましたが、無念なことに昨年の暮、交通事故の奇縁にあり、片足を切断、眼下、姫路市本町の多胡病院に入院していますため、それもかなわず、病床から文章をもって、

関係方面の与論を勧起せんとしているもの  
です。

ます墓相学で有名な大阪の篠原会の川舟  
氏と、日頃から懇意にしている河本代議士  
に呼びかけ、河本氏を通して、氏が懇意に  
している民自党の三木武夫氏や佐藤大阪府  
知事へ、また私の親族の中で、大阪市庁の  
課長をしている者がありますので、それを通  
して中馬大阪市長へ、「其田山陸軍墓地を、何とか復興してもら  
いたい」

と働きかけたいと願っています。

これには真田山陸軍墓地の現状を詳細に  
報道した鷺峰十一月号を、各要人に直接読  
んで頂くがよいと思い、誌代は振替で送り  
ましたので、十一月号の余分を数冊お送り  
下さい。

私の経験としては、石見姫路市長が日蓮  
宗であることを幸い、姫路市内に散在して  
いた戦災墓を収容するのと、姫路陸軍墓地  
を整理することを提案し、言い出した責任  
上、墓地整理委員（今でもそうですが）と  
なり、郊外の名古山に、仏舎利塔を中心と  
して公園墓地を建設したことがあります。

これには、私の従兄が参議院の建設省政  
務次官をしていましたので、従兄を通して  
建設省の応援も得て、昭和二十六年から三  
十一年まで丸五カ年間を要し、今では仏舎  
利塔を中心とした立派な市の公園墓地とし  
て、毎日参詣人や団体見学者の絶えたこと  
はありません。なお、この墓苑の近くには  
間もなく、二、三千人も収容出来る講堂も  
立てられることがなっております。

こうした見地から、真田山の陸軍墓地も、糸尊の宝塔を中心に、数万の英靈のお墓を一ヶ所にまとめて、お盆と春秋二季の両彼岸には、各種団体の奉仕によって盛大な追善供養を営むようにしては……と願っています。

大阪の真田山も、姫路の名古山のように今に本腰を入れたら、きっと良くなりましょう。

若し、良くなったら、身延山学生街頭布教隊のおかげです。私は真田山を、あの記事のまゝ、ほっておくことは出来ません。

## 讀者の声

### 行動雑誌

#### 鷺峰を讀えて

秋田県日蓮宗青年会

分 銅 志 静

その 2

鷺峰は実に素晴らしい雑誌です。配達になると、むさぼるように読みはじめます。今までに読みおわりました。

純真な学生諸士の文章は、何ものにもかるがたい、何時も深い感動をおぼえます。特に体験や実践を通しての赤裸々な吐露告白ですから、色々な面で啓発されます。

これまで宗門には、いろいろな雑誌がありましたが、雜誌そのものが行動するといふ性質でなく、学者の空理空談が多く、私には全く魅力がありませんでした。

鷲峰は、そうした中につけて、まことに珠玉のように輝くものです。どうか実践体験を通して、その中に正しい日蓮大聖人の教学の一にじみ出て来るような記事を讀載し、大人も子供も興味をもって読み、そして正しい法華經信仰が、大地にしみ通るよう、多くの人々の心魂深く根ざすよう、一層の努力をされ、宗風宣揚の金字塔となつて下さい。そのことを遙く秋田の空から切に祈っています。

誌代三千円同封しました。残余の金額は資金の足しにお廻し下さい。なお余裕が出来ましたら、これまでの冊数をまとめて、

日高上人のおられる波木井の醜信園本妙庵にも、一度は必ずお参りしたいと思っております。鷲峰十月号の「伊藤日定上人と醜信園本妙庵」の記事を拝し、本妙庵の復興して行く様子に、深い感動をおぼえました。

本妙庵の開山である本妙日臨上人は、御本尊や書翰の筆跡からみても、純真清澄なお方のよう拝されます。若し、もう十年も寿命がそりまいたら、きっと日高上人のように、若い同志青年僧をひきつれて、街頭に獅子吼されたことでしょう。

本妙日臨上人を、単に律師や学僧とのみ見ることは、大きなまちがいと思います。かねて私は、日臨上人こそ眞の法華經の行

者として挙げ、敬慕渴仰やみがたきものを常々いだいているものです。

鷺峰が本妙庵に集う身延の学生僧によつ

て発行されることは、今後の宗風宣揚の上  
更に意義深なるものがそると思ひます。

## 讀者の声

### 久遠の心

自我偏譲義を読んで

奈良学芸大学四年

榎本蓮子

その3

宇井伯寿の「仏教哲学の根本問題」といりませんでした。

う書をお送り下さいまして有難うございま  
した。この書をテキストに使って正月八日  
より三日間、鷺峰会の教学研修会が本妙庵  
で開かれたのだと思うと、なつかしくてな  
さて、卒論を書きつゝフトこんなことを

考えていました。

☆

はじめに法というものがあって、家庭が

おり社会がある。家庭のため国家社会のために、法があるのではない。

私たちは、法によって生かされているのであって、法を抜きにした自分というものは至りえない。

そして、その法とは、宇宙の真理といつたようなものではなく、

今　本時の娑婆世界は

三災を離れ、四劫を出でたる

常住の淨土なり

仏、過去にも滅せず

未来にも生せず

所化もって同体なり

という日蓮大聖人の御妙判の如く、日蓮

大聖人のような心に感ぜられるところの、絶対なるものを指して言っているのではないのだろうか。

一瞬一瞬、生滅流転するこの現在の一瞬は、一見、限られた時間のようではあるけれども、善につけ惡につけ、過去のどの一つを抜きにしても、現在の一瞬は存在するものではない。

現実のこの一瞬こそ、悠久なる過去の必然性と、同時に永遠なる未来への可能性をふくむものである。

過去をふりかえって嘆くのではなく、未來を夢想して浮かれるのでもなく、今の一瞬、この現実に与えられた自分の立場を、じっとみつめて、過去を深く反省しつゝ、創造の未来へと力強く前進していく、その心こそ、真実なる法というものを感得す

ることが出来のではないだろうか。

大聖人は、

「自分が過去世において大王であった時、  
悪政、暴政をほどこして、万民を多く苦し  
めたために……」

と過去を懺悔されておられるが、然し、  
過去世のことは、容易に解るものではない。  
大聖人が上行菩薩の再誕と自覺されたのも  
現在の一瞬、この現実相を、じっとみつめ  
られた時、そういう事実が、過去、あった  
にせよ、無かったにせよ、それをそのまま  
に認めることが出来た境地を発得されたも  
のであって、これが肯定、肯定、絶対肯定  
の世界であり、久遠の境地というのではな  
いだろうか。

人間釈尊が過去の世において、阿私仙に  
対して千載給仕されたというのも、釈尊が

今生人間として悟りを開かれた時、その境  
地において、そういう過去があつたにせよ  
無かつたにせよ、それをそのまますべて認  
められたのではないだろうか。

私たちは、法華經を信仰することによっ  
て、この境地をとらえねばならない。この  
境地は信仰による外ではなく、信仰も法華經  
による外はない。

そして釈尊が、現在の一瞬において、提  
婆達多の身に、過去の阿私仙の姿と、未来  
の天王如来の姿を見られたが如く私たちも  
その境地に入った時、はじめて當不輕菩薩  
の如く、人間礼拝に徹することが出来るの  
ではないだろうか。

大聖人は、

日蓮と同意ならば  
地涌の菩薩たらんか

とも或は

地涌の菩薩にあらずんば

唱え難き題目なり

とも仰せられているが、私たちが過去世において事実、地涌の菩薩であったかどうかは解らない。然し現在の一瞬において、やはり過去世は地涌の菩薩であったのだ、と、みずからを認めるこの出来る自分自身の心こそ尊いのではなかろうか。

☆

このように思い当たる時、今までの迷いが、思わず何處かへ吹っ飛んでしまい、このことを日高上人に訴えたりました。これまでの私は、過去、現在、未来と推移流転する時間的観念の中で、釈尊が阿私仙に対して給仕したといふことも、釈尊の過去世における、そうした事実を明かにす

ることによって、天地に遍満する久遠の大生命なるものを、具体的に立証したものとばかり思つていました。

ところが久遠ということは、流転する時間ではなく、前後際断した釈尊の絶対なる悟りの境地において、はじめて言ひうるものであつたのです。

そして釈尊の、この偉大なる精神が、そのまま法華經となり、お題目となっていたのです。私たちが成仏することが出来るというのも、このためでした。

そう思うと、これまで取りあやまつていた釈尊に対しても、法華經に対しても、ひれ伏したい懺悔にかられずにはおられません。

驚峰誌に自我偏諱義が連載される、ずっと以前から、陰に陽に日高上人から、こう

したお話をうけたまわっていました。然し、その頃の私は、心にビンと感ぜられず、むしろ半信半疑でした。

ところが鷺峰誌上、自我傳講義が連載されるようになり、これを熟読する時、今になつて日高上人の、法話の一つ一つが身にしみ、心に突き通つて来、心も張り裂けんばかりです。

鷺峰の自我傳講義は、これまでの日蓮門下一般の法華經信仰を一段と飛躍させ、まことに仏意にふれせしめて行くことでしょ

う。  
私も卒論の終り次第、鷺峰誌を通して一層、法華經に心を深めて行きたい、と念願しているものです。

昨年九月号より本誌発行所を身延山より甲府市朝日三丁目二番地

の妙本寺内へ変更しましたが、妙本寺へ送られた通信は一切、波木井の本妙庵へ廻送され本妙庵で整理されます。

従つて振替口座の払込み以外の通信は、すべて直接本妙庵へお送り下さいます様、お願ひ申上げます。

本妙庵では日高編集長をはじめ鷺峰会学生が、本誌の事務一切を取扱つております。これまで一般通信の殆どが妙本寺へ送られていましたが、御返事が随分遅れています。今後振替以外は山梨県身延町波木井の鷺峰院本妙庵へお願ひ致します。

(編集部)

## 堅実な本誌運営のため

本誌は身延山学生僧が中心となり、贊助会員の御協力のもと発行しているものです。が、過去丸一年間、欠刊もなく維持出来ましたのも、読者皆様の御支援のたまものと感謝申上げます。

一、本誌の見本贈呈について 本誌は有縁の人々に見本として二、三ヶ月贈呈いたしました。お断りのない場合、御購読いたどけるものとして引きつきお送りしております。また所、年末には発行部数の三分の一が誌代未納のまゝとなつておりました。

このまゝでは本誌の維持は困難になりますので、年末十二月号発行と同時に、誌代

切れ、並に誌代御納入のほどをお通知し、お願い申上げた次第であります。徒手空拳の学生僧が、街頭布教の争財でも発行資金としております本誌でありますので、非礼の点は何卒御寛恕の上、一層御協力、御支援下さいますようお願い申上げます。

一、今年がヤマ、本誌も今年で創刊以来三年目を迎えました。つぶれるのも発展するのも今年がヤマです。今年こそ読者皆様の御期待に応えられるよう、内容の充実に賄りて堅実な運営の出来るよう一層努力していく方針です。贊助会の方々も、本年度の御贊助のほど切にお願い申上げます。

頬

春



鷺峰会

昭和四十年 元旦

謹みて新春を慶賀し、鷺峰贊助会員と  
全国読者皆様の御多幸をお祈り申上げ  
ます。何とぞ今年も倍旧の御指導、御  
支援をたまわりますよう、そして鷺峰  
を通じて仏祖の悲願の達成されますよ  
う、切に御協力をお願ひ申上げます。

編集後記

☆お釈迦さまが法華経を説かれたインドの靈鷲山へ渡るべく、これまで身延山本師堂内陣に安置されていた金銅の釈尊像が、いよいよ本年インドへ贈られることになります。というのは本年三月、靈鷲山仏舍利塔の定礎式が、インドの首相、大統領はじめ国家要人によって厳修されるからです。☆この釈尊像の渡印は、「日は東より出て西に入る、日本の仏法の月氏（インド）へ還るべき瑞相なり」と仰せられた大聖人の予言を果し、本仏釈尊の靈鷲山と、本化上行菩薩の再誕日蓮大聖人の身延山とを結ぶことです。法華経の広宣流布、世界の平和は、こゝから與って来ます。釈尊滅後三千年來の好機、こゝを逸してはなりません。

驚

醉

正月号

昭和四十年 第三卷 第十九号

定価 五十円 二十円

昭和三十九年十二月二十日  
昭和四〇年一月一日 発行 印刷

編集兼発行人

山梨県身延町波木井 醍醐園本妙庵

日高白象

印刷所 甲府市中央二丁目五ノ二三

天野勝写堂

発行事務所

甲府市朝日三丁目二番地 妙本寺内

驚 醉 会

電話（甲府）二局五五八五番

振替（甲府）二〇九三番

三〇〇円 二十円 六〇円

三〇〇円 三十円 六〇円

三〇〇円 三十円 六〇円

賛助会費

一年分

三〇〇円 分納可